

6年次生が「文藝コンテスト」で最優秀賞を受賞！

京都市にある大谷大学が高校生対象に募集した「文藝コンテスト」で、本校6年次の富士登さんが、見事**最優秀賞**を受賞しました。そのことに関する取材があり、平成29年4月25日付け「産経新聞」21面に下の記事が掲載されました。本人と記者さんに許可をいただきましたので掲載します。私は、このような**クリエイティブな活動**は、本当に素晴らしいと思います(^_^)。皆さんの**可能性は「無限大」**だと思います。

自由に書ける小説が好き

高校3年 富士登さんが最優秀

大谷大（京都市北区、木越康学長）が高校生を対象に募集した「文藝コンテスト」の小説部門で、つくば市の県立並木中等教育学校6年（高校3年）の富士登湖雪さん（17）の「ピンチサーバー」が最優秀賞を受賞した。富士登さんは小説家志望で、6月の同校文化祭のため、映画のシナリオも書いた。しばらくは受験勉強に専念するが、「読書や文章を書くのが好きなので、大学に進学したらいっぱい小説を書きたい」と夢を膨らませている。

大谷大「文藝コンテスト」

富士登さんが文章を書き始めたのは小学5年のころ。国語の教科書に「小さい物語を作ってみよう」とあったことがきっかけだった。「もともと読書や書くことが好きだったので、友人が夏休みの宿題で『作文嫌だな』と言っているのが分らなかった」という。

その後も文章を書き続け、中学3年で旺文社の「全国学芸サイエンスコンクール」の小説部門で金賞を受賞するなど、さまざまなコンテストで入賞している。

今回の受賞は大谷大から携帯電話に連絡があった。「何気なく応募したので、すぐびっくり。電話だったので確

証が持てず、聞き間違いだしたらどうしよう」と思ったと

いう。受賞作「ピンチサーバー」は、バレーボール部を舞台に、女子高校生の恋愛や、お互いに尊敬しあっている



「将来は小説家が夢」と話す富士登湖雪さん
つくば市並木の並木中等教育学校

が、少し嫉妬もある友人との複雑な感情をテーマにした。

今は6月の文化祭に向け映画「夏風のくしら」を制作中。美術部を中心にクラスの「上位層」とおとなしい生徒たちとの確執を描いた。富士登さんは脚本を書いたほか、総監督や学校への書類作成など事務処理もこなす。「言い出しつべなので、私がやるしかない」と言いながらも楽しそうだった。

好きな授業は世界史。「絵や小説など、その時代ごとに、それにまつわる人物の逸話や歴史の事件の裏にあるドラマが好き」と話す。

文化祭が終われば本格的な受験勉強が待っている。小説家志望だが、大学では社会学を学ぶ予定だ。「社会の仕組みや社会問題などを学べば、将来の仕事に向けての勉強にもなり、自分の知識として持っていて損はない」と先を見据えている。

さまざまな分野の文章を書くが、「読書感想文などの作文系は、求められる答えが何となく決まっているときがある。自由に書ける小説がやっぱり好き」と目を輝かせている。